

教育講演 1

当事者の専門知に学ぶ

向谷地 生良

北海道医療大学 看護福祉学研究科 教授

座長：榎 恵子（神奈川県立保健福祉大学 教授）

当事者の専門知に学ぶ

向谷地 生良

北海道医療大学 看護福祉学研究科 教授

1. 精神医療の世界との出会い

学生時代は、福祉を学びさまざまな領域の障害者運動に触れる機会を持ちながら、卒業後(1978)は精神医療の世界に飛び込んだ私にとってそこは、驚きと発見の連続であった。そこには想像もしなかった独得のルールがあった。例をあげると病棟のすぐ隣のスーパーに買い物に行く場合、三日前までに外出届が義務付けられていた。それを、破った場合、外出禁止と言うペナルティーがあった。もちろん、届を出さずに、買い物に行く人も後を絶たず、そこには腹の探り合いのような雰囲気生まれた。そこで、気づいたのが、「医学」は囲い込みの「囲学」,「看護」は管理のための「管護」,そして「福祉」は服従を強いる「服社」に陥っていることであった。

そこから生まれた問いは、専門教育を受けた専門家が、治療やケア、相談支援の理念からもっとも遠い「囲い込んで、管理し、服従を強いる」という現実に入り、しかもそれを温存、増強させようとする要因はどこにあるのか、ということであった。

2. 「臨床の知」へのパラダイムシフト

この問いは、今も続いているが、これを乗り越えるために必要なのが、ドナルド・ショーンの言葉を借りるならば、専門家自身が自らを「省察的实践者」と見なすことである。この精神医療の世界において、「実践しながら考える」というプロセスの放棄を生み出す背景には、何があるのか。それは、精神医療の世界は、他領域に比べて、「期待される回復に向けた目標」と「起きている出来事」の落差が大きく、「不確かさへの耐性」を求められるからだとは私は考える。わかりやすく言うと、「腹が立つこと」が多くなる。これは、私の素朴な発見であり、このことが、私たちの知識や技術を凌駕し、パターンリズムに陥らせるのではないかと考えるようになった。

そのような現状を変えるためには何が必要なのか。それは「科学の知」に依拠することによって成り立つ専門家から、「臨床の知—近代科学への反省をもとに、それが見落とし排除してきた諸側面を生かした知のあり方」(中村雄二郎)を重んじる専門性へのパラダイムシフトなのではないかと考える。

3. 省察的生活者としての「当事者の知」との協同

精神医療の世界において「専門性」は、一つの役割を越えて「力」を獲得し、それに対抗するように当事者等は、自らの経験と意志の優位性を力説し、さながら「権力闘争」のような対立を続けた時代があった。しかし、専門家のよって立つ「科学的であること」の拠り所であった薬物療法の限界が見える中で、あらたな変化が起きている。それは、1990年代にはじまった科学的根拠を基盤としたアプローチ重視から、当事者の経験をベースに考える「リカバリー」の概念の誕生と普及である。そこから生まれたのが、co-production(共同創造)であり、当事者研究は、その先駆的な取り組みの一つであり、「当事者の知」との協同を促す実践的な活動として注目されている。

教育講演2

思い出を未来へと紡ぐ博物館 —博物館体験の長期記憶の語りから探る 博物館の意味—

湯浅 万紀子

北海道大学 総合博物館 教授

座長：樋之津 淳子（札幌市立大学 看護学部 教授）

思い出を未来へと紡ぐ博物館 —博物館体験の長期記憶の語りから探る博物館の意味—

湯浅 万紀子

北海道大学 総合博物館 教授

博物館。そこから最初にイメージされるのは、さまざまな学術分野の貴重な標本や史料が並ぶ展示室の光景かもしれない。しかし、博物館の営みは展示に留まらない。展示されているモノは、博物館の学芸員や研究者による収集、保存、研究というプロセスを経て、展示の企画担当者の意図のもとにそこにある。そして、博物館のバックヤードには、過去から現在、未来へと社会に受け継いでいくべき膨大な数のモノが収められている。

日本には5,000館を超える博物館があるが、歴史系博物館や民俗系博物館などと比較すると、大学博物館の数は少ない。本講演では、北海道大学総合博物館を事例として大学博物館の歴史と活動展開を紹介した上で、博物館の存在意義、そして博物館評価に関する課題について解説する。

社会に当然のように存在している博物館であるが、近年は、その設置主体が博物館の運営を見直して、博物館の存続を再検討する局面が生じている。博物館の存在意義とは何か。博物館の運営を検討する際に必ず指標とされるのが入館者数、そして、展示やセミナーなど企画の開催回数や参加人数も無視できない重要な指標である。しかし、これだけでは博物館の存在意義を検討するのに十分ではないのではないかと。「博物館が」実施したことについてだけでなく、「来館者を含めて博物館に関与する様々な人が」博物館で何をしたのかに注目する検討が不可欠である。多くの博物館で質問紙調査を実施し、来館者のプロフィールや、展示や企画に対する満足度を問い、回答結果を分析しているが、それは多くの場合、展示を観覧したり企画に参加した直後に実施される。しかし、展示や企画について満足したか理解したか否かを直後に確認しても、それが数日後、数ヶ月後、あるいは数年後に保持されているかは分からない。また、博物館で人々が得ることは、何かを理解したという認知面での学習に限定されるものではない。そして、来館者だけでなく、博物館活動に関与する様々な人、たとえばボランティアや友の会会員、職員、地域住民、設置主体なども視野に入れる必要があるのではないかと。

以上の問題関心から、私は、博物館の存在意義を探る重要な指標の一つとして、人々の「博物館体験」の「長期記憶」に注目し、「記憶のなかの博物館」という研究テーマを設定して、認知心理学者らと共に学際的な調査研究を展開してきた。過去に博物館で様々な体験をした人々に実施した聞き取り調査によって、彼らの語りを個人的背景や社会背景などとともに分析することで、人々の博物館体験の意味を明らかにし、博物館の今後の活動指針を導きたいと取り組んでいる。本講演では科学館や歴史系博物館などで実施してきた研究成果を紹介する。